薬学教育　第 10 巻（2026）
© 2026 日本薬学教育学会

第58回日本医学教育学会学術大会ジョイントシンポジウム1 実施報告

有田 悦子[1]，永井 純也[2]，高橋 一栄[3]

[1] 北里大学薬学部，[2] 大阪医科薬科大学薬学部，[3] 大阪府済生会野江病院薬剤科

第58回日本医学教育学会学術大会ジョイントシンポジウム1の実施までの経緯

第 58 回日本医学教育学会学術大会ジョイントシンポジウム 1（以下，本シンポジウム）は，一般社団法人 日本医学教育学会と一般社団法人 日本薬学教育学会との初めての共催シンポジウムとして，第 58 回日本医学教育学会学術大会（以下，本大会）の 2 日目［2026 年 8 月 2 日（日）］の 13:10 〜 14:40 のセッションとしてプログラムに組み込まれ，実施された．

まず，本シンポジウムが開催されるに至った経緯を述べる．2024 年 8 月に開催された第 56 回日本医学教育学会大会に参加した有田悦子（北里大学薬学部・日本医学教育学会代議員）（以下，有田）が，第 58 回日本医学教育学会学術大会大会長の高村昭輝氏（富山大学学術研究部医学系医学教育学講座 教授）とコラボ企画の方向性について話されたことが契機であった．その後，日本薬学教育学会理事の高橋一栄（大阪府済生会野江病院薬剤科）（以下，高橋）と第 11 回日本薬学教育学会大会の実行委員長を務める永井純也（大阪医科薬科大学薬学部）（以下，永井）が参画し，有田がオーガナイザーとなり本大会での実施に向けて登録申請が進められた．最終的に，本シンポジウムのタイトルは「臨床実践力を備えた医療人育成に向けた薬学教育と卒後研修の新展開」と設定され，下記の 4 名のシンポジストが登壇する本シンポジウムが採択された．本大会当日の参加者は約 65 名であった．座長は永井と高橋が務めた．

本シンポジウムの開催趣旨

近年，医療の高度化やチーム医療の進展に伴い，薬剤師には多職種と協働し，患者に最適な薬物療法を提供する実践的かつ統合的な臨床実践力が求められている．これを育成するためには，薬学教育関係者のみならず，医学をはじめとする他の医療職との連携が不可欠である．2024 年度入学生から適用された薬学教育モデル・コア・カリキュラム（以下，コアカリ）令和 4 年度改訂版では，薬剤師に求められる基本的な資質・能力 10 項目のうち 9 項目が医学・歯学教育と共通化され，医療人教育における接続性や相互参照性の重要性が高まっている．本シンポジウムでは，薬学・医学の教育関係者が一堂に会し，卒前教育から卒後研修，生涯研鑽までを見据えた臨床実践力の育成について多角的に議論し，医学教育との連携を踏まえた今後の薬学教育のあり方を考察することを開催趣旨とした．

本シンポジウムの内容

講演の 1 件目では，オーガナイザーである有田から「臨床実践に資する薬学ヒューマニティ教育の挑戦―医療人共通基盤の醸成に向けて―」と題して講演がなされた．有田からは最初に，薬剤師を取り巻く社会状況の変化に伴い 2006 年に 6 年制薬学教育が導入されたこと，2015 年の「患者のための薬局ビジョン」が「薬中心」から「患者中心」へと移行した薬剤師の役割を広く周知する機会となったことなどが述べられ，過去 20 年間の振り返りがなされた．さらに，コアカリでは，「コミュニケーション能力」に続いて，「総合的に患者・生活者をみる姿勢」が追加され，医療人としての基盤となる資質・能力の共有化が進んでいることについて言及した．これからの薬剤師養成には，患者・家族の身体的，心理的，社会的背景を踏まえた全人的理解と倫理的判断力を育むヒューマニティ教育の重要性がますます高まっていることを述べた．その上で，コアカリ令和 4 年度改訂版におけるヒューマニティ教育の位置づけと意義の整理，教育の実践例の紹介がなされ，臨床実践につながるヒューマニティ教育の在り方が示された．

講演の 2 件目では，木内祐二氏（昭和医科大学）から「医系総合大学における体系的，段階的な臨床薬剤師教育とチーム医療教育」と題して講演がなされた．近年の医療の高度化や超高齢社会，地域・在宅医療の進展を背景に，薬剤師には患者中心の視点と多職種協働のもと，薬物療法を主体的に実践する臨床実践力が求められていることが示された．昭和医科大学では，医・歯・薬・保健医療学部と附属病院を有する医系総合大学の特性を活かし，6 年制導入時から体系的・段階的な臨床薬剤師教育とチーム医療教育を展開していることが紹介された．低学年からの臨床体験，フィジカルアセスメント，臨床推論や EBL の演習などを経て，5 年次には患者担当制の診療参加型臨床実習を実施し，実践力を養成していることが説明された．また，全学部・全学年を対象としたチーム医療教育カリキュラムを展開しており，病院・地域・在宅における多職種連携能力の修得を図っていることが紹介された．これらの教育実践の成果と課題，今後の展望について述べられた．

講演の 3 件目では，崔 吉道氏（金沢大学附属病院）から「2040 年の地域を支える薬剤師の卒前・卒後教育と生涯研鑽～大学病院薬剤部の視点～」と題して講演がなされた．最初に，薬剤師の臨床実践能力を担保するためには，卒前教育に加えて免許取得直後の臨床研修を充実させ，卒前・卒後を一貫して捉えた教育体制を構築することが重要であることを述べられた．一方，令和 3 年度厚労科研調査によれば，新人薬剤師を対象とした体系的な研修を実施している施設は限られていることが紹介された．こうした現状において，地域医療を俯瞰し，多職種・施設間連携を担える薬剤師の育成が課題となっていることを踏まえ，金沢大学病院薬剤部では 2017 年に策定した「金沢大学薬剤師スタンダード（KUPS）」に基づき，5 年間の体系的な人材育成プログラムを実践していることが紹介された．病棟や外来部門などのローテーション研修に加え，地域の中小病院などへの出向を通じて，幅広い臨床実践能力と地域医療を俯瞰する視点を育成していることが述べられた．これらの取組を踏まえ，地域を支える薬剤師の卒前・卒後教育と生涯研鑽のあり方について述べられた．

講演の 4 件目では，大会長でもある高村昭輝氏から「臨床実践力を備えた医療人養成～医学と薬学でできること～」と題して講演がなされた．医療者教育において「多職種連携能力」が重要な基本的資質・能力として位置づけられており，薬学・歯学・医学のコア・カリキュラムでコンピテンシーが統一された意義について説明された．一方，低学年では多学科合同教育が広がっているものの，高学年の臨床現場における多職種連携教育は，組織的・継続的な実施に至っていない現状を述べられた．その背景として，大学・学部間の物理的距離に加え，教育者間の心理的距離や職種間に残る権威勾配などの可能性を述べられた．今後は，大学間・学部間の連携を強化するとともに，薬学・歯学・医学・看護学の教育関連学会が協働し，臨床前教育から臨床教育まで一貫性と継続性を持った教育を推進することが重要であるとの考えが示された．これにより，医療者が共に学び成長する「学びの実践共同体」が形成されることへの期待が述べられた．

上記の 4 題の講演後は，シンポジスト 4 名が登壇し，総合討論が行われた．フロアからは 3 名の方に質問をいただけた．一人目は三重県で病院経営にも関わる総合診療医の立場から，患者の療養が「急性期」，「地域包括ケア」，「在宅」という経過を経る場合に，薬学部実務実習では真ん中の「地域包括ケア」に相当する教育経験が必ずしも十分でないと考えられ，それを踏まえて地域における医療活動を卒後研修としてプログラムに組み込む必要性などについて尋ねられた．二人目は大学病院血液内科に所属の質問者で，6 年制薬学教育がスタートして 20 年が経過したが，その成果はどのように評価されるべきかについてシンポジストに意見を求められた．三人目は医科大学に所属されている方からであり，薬剤師国家試験の内容に関して，臨地実習などには改善の余地があること，物理・化学・生物といった基礎薬学分野のあり方や位置づけなどについて質問を投げかけられた．

総合討論の最後に，本シンポジウムに出席されていた日本薬学教育学会理事長の乾 賢一氏に座長指名で総括をいただいた．乾氏からは，本シンポジウムは，初の日本医学教育学会と日本薬学教育学会の共催シンポジウムであり，その嚆矢として相応しい有意義な講演や意見交換がなされていた旨の講評があった．また，これからの薬学についても触れられ，3 つの重要な共通認識として，「薬学の関係者が一枚岩となって教育に携わること」，「薬学が常に社会に監視されていることを認識し，そして社会への貢献度をより高めていくこと」，そして「薬学が将来にわたって持続ならびに発展していくために，薬学のサスティナビリティ意識を高めること」を強調された．

おわりに

最後に，座長の高橋より，本シンポジウムの実施の意義と開催に当たってご協力いただいた関係の方々への謝意が述べられた．加えて，本大会開催と同月の 8 月 22 日（土），23 日（日）に大阪医科薬科大学阿武山キャンパスにて開催される第 11 回日本薬学教育学会大会についても紹介がなされた．

謝辞

本シンポジウムの開催にあたって，日本医学教育学会理事長 錦織 宏氏，第 58 回日本医学教育学会学術大会 大会長かつ本シンポジウムの講師もお務めいただきました高村昭輝氏ならびに大会実行委員会の皆様方に心よりお礼申し上げます．また，本シンポジウムの講師を務めていただいた，昭和医科大学 木内祐二氏ならびに金沢大学附属病院 崔 吉道氏に厚く感謝申し上げます．